

昭和二十二年十一月二日、船は舞鶴に入港した。周りの山々の景色を眺めながら、祖国の土を踏んだ。

私は過去を振り返り、入ソ以後九百八十人の作業大隊で二百三十二人の犠牲者が出たのである。

母を想い妻や子供の夢を見つつ無念にもはかなく散っていった多くの犠牲者に、衷心より哀悼の誠を捧げ、ご冥福をお祈りします。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年二月二十三日

住所 滋賀県長浜市一の宮町

本籍 滋賀県八日市市岡田町

入隊 昭和二十年三月五日（広島集合）

三月十二日瓊瑋六一二部隊入営

入ソ 昭和二十年九月

抑留地 プラゴエシチェンスク、スーチャン

作業 道路作業、伐採、農作業

引揚げ 昭和二十二年十一月二日舞鶴入港

復員後は会社勤務を経て昭和四十四年独立し、イン

テリアの会社を経営、現在は息子さんが代わっている。

（滋賀県 村田 健造）

我が人生

滋賀県 高田 義信

大正七（一九一八）年八月二十七日 滋賀県長浜市

下之郷町に生まれる（男五人の末子）。家は

天鷲^{ヒコドリ}絨織業。

昭和八（一九三三）年三月 長浜市神照小学校高等

科卒業

昭和十一年三月 県立長浜農学校卒業

昭和十三年三月 青年学校教員養成所卒業

昭和十三年四月 公立老蘇青年学校就職

同年八月 徴兵検査で第一乙種合格

昭和十四年一月 同校休職し敦賀歩兵十九連隊に入

営

同年四月 第一期検閲

同年五月 幹部候補生（幹候四期生）

昭和十四年十一月 仙台予備士官学校に入学

昭和十五年六月 敦賀十九連隊第二中隊付

昭和十五年七月、北支独立混成九旅団（谷部隊）に転属となり、大阪港より船にて大沽まで、その後汽車にて天津、北京經由、石家荘で乗り換え、太原着。到着後一番に眼に映ったのは太原城の大きなこと、城壁の高さ十メートル余り、上幅七メートル、下幅二〇メートル余りの城にびっくり。兵站にて予防接種その他戦地における諸々の注意等の教育を受ける。一週間後谷部隊司令部で申告、旅団長閣下その他参謀高級副官等より諸注意があり、各自の部隊転出先の辞令を受ける。私の転出先は忻県第三十九大隊付となる。部長村上大佐に申告をする。和通信教育受講のため太原旅団通信隊に出向、四カ月の通信教育を受け、あと数日で卒業するのに急性腎臓炎で太原陸軍病院に入院、三カ月後に退院する。谷部隊司令部より第一軍乙部隊に出向を命ぜらる。北京通信学校入校。卒業と同時に

乙部隊参謀第一課付となり、兵站業務補助で泉中佐参謀のもとで勤務する。中支第二次長沙作戦応援のため谷部隊が移駐するに当たり原隊復帰する。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争を石家荘で知る。南京より揚子江を遡船して兵州に到着する。谷部隊は作戦参加、影珠山戦で一個大隊が玉砕をする激戦があったが、和岳州警備のためその難を逃れた。その後谷部隊は武昌付近の警備、三月北支に帰り徳県付近の警備に当たる。六月より谷部隊参謀部付となり兵要地誌関係を受け持つ。同十八年谷部隊は天津に移動、付近の警備に当たる。十八年十一月召集解除のため、甲府近衛四連隊に転入、同十二月召集解除される。

五年ぶりに我が家に帰る。学校長の要請により東京農業大学で四カ月間農業土木の講習を受ける。四月一日付で長浜農業校に就職、新設土木科一年生の担任となる。

同年七月七日、敦賀三十六部隊に召集され假編第二大隊、第二中隊長を拝命する。同隊は北方軍に属し同月、北海道根室にて独立混成六十九旅団に転入、根室

港より色丹島に到着する。同日付にて国後島警備大隊に転出、同島白糠付近の警備部隊で満州より来た現役部隊で幕舎生活をしていた。到着と同時に部隊付、主として島の兵要関係の確認を行う。それがため大隊長と共に島を巡察する。爺爺岳（一、八二二メートル活火山）、乳呑路、古釜布、東沸泊等の村町も調査し、一般住民との交流を兼ねて視察する。

このとき特に気がついたのは、

(1) 馬の放牧で牡馬を中心に二、三十頭が走り回っていた。また、駅という人家のある所には馬を頼むと鞍をつけて次の駅まで貸してくれる。到着して離せば馬は元の駅まで帰るといふ。

(2) ヒグマは至るところで見受けられるが、こつちより何もせず、鳴り物で相手に知らせれば、ヒグマは立ち去る。

(3) キツネの数は少なく、その餌としてネズミを放したのが増え過ぎてキツネの方が逃げ去る始末。

(4) カラスは多くその声たるや太く嫌な存在。

(5) 鮭は秋その群れが漁場に来ると海一面銀色に輝

き、雄大さまた格別、大漁に沸き大騒ぎ。

(6) その他カニ、タラ、カレイ、イカ、イワシ、ニシン、帆立貝等、また昆布等、まさしく海の宝庫。

(7) 野菜としては大根などで米は取れない。

(8) 参考、遠くて近い北方領土

・択捉島（三、一八四平方メートル、鳥取県三、五〇七平方メートルに近い。当時の人口三千六百五人）

・国後島（一、四九九平方メートル、沖縄本島一、一九九平方メートル。当時の人口七千三百四十三人）

・色丹島（二五三平方メートル、徳之島二四八平方メートルとほぼ同じ。当時の人口千四百四十一人）

・歯舞群島（一〇〇平方メートル、小笠原島一〇〇平方メートルに同じ。当時の人口千四十一人）

昭和二十年三月、通信隊長要員として北海道帯広に

転出する。第八十九師団推部隊隷下となり当地で通信隊を編成する。ただし兵には三人に小銃一、弾は十五発、はなはだ心もとない。

同年五月十七日兵員二百五十人、根室港より択捉島単冠湾天寧に着く。天寧西側地区の基地整備、南千島全般の通信網整備等を恩根別川の中流推司令部より奥に基地を設置する。

ソ連軍侵攻前

連日米軍のニュースで日本国土の爆撃を電波にのせる、その都度推司令に報告をする。その後、段々と戦況が悪くなるばかり、七月のカイロ宣言は特に重大なので直接推司令部に電文を持って報告する。

八月六日 広島に原爆投下

八月九日 長崎に原爆投下

等、誠に悲しむべき事態ばかりが多く切ない。八月十日、ポツダム宣言を受諾するとの電文が舞い込む。

八月十五日正午、重大なる放送があるから各部隊にその旨通報する。電波は解除されていたが、詔勅の内容が雑音多くして理解し難い。そのためあれこれ憶測

が飛び交う。それがため推司令部の了解を得て、本詔勅の電文を印刷して各部隊に渡す。それによって真意を知る。各部隊ただた無言、成すことを知らず、しかしそれがための混乱は特になし。

終戦になっても南千島択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は江戸時代からの日本国土である。船が迎えに来れば全員帰ることができるとの認識のもと、今は各隊に不必要なものは皆焼却する。全部隊帰還に関する人員等を司令部に提出せよとの内示があり、それまで待機せよとのことであった。日がたつにつれて段々雲行きが怪しくなってくる。推司令部から何の指令もなかった。

ソ連侵攻

八月二十三日頃、ソ連一個部隊が上陸する。推司令部から武装解除についての細部の通達もない。かくするうちにソ連軍は各部隊の武装解除を行った。

(1) 兵隊は兵器、弾薬、帯剣、銃(すべての)無線器等没収する。

(2) 将校は拳銃、弾薬、双眼鏡等没収。ただし将校

の軍刀、階級章はそのままとする。

(3) 兵と将校とは兵舎を別々にする。

かくして日時は過ぎる。

九月初め、東京ダモイとのことで全員飛行場に集合せよと知らせる。帰るに当たり内地では物資不足を耳にするので、各自持てるだけ多くを持って飛行場へと集合する。その際、ソ連隊長は各部隊の副官を集めて左のごとく下命する。

(1) 下士官兵はほんの手荷物一個

(2) 将校は行李一個

それ以上の物を持つこと禁止する。もしもこれ以上の物を持っている者は当地に残して塹壕掘りをさせ、東京ダモイはさせない。

その敵命に従って皆ほんの荷物だけで後は捨てる。

今しばらくの辛抱だ。帰れば何とかなるだろうとの雰囲気だった。

この際の輸送副官を私に任命する。

各部隊ごとに人員の点検荷物調べをしてから逐次乗船をさす。乗船して外を見渡すと前後に護衛艦がいる

ので異様に思ったが、ソ連兵の言葉を信じ、その後の事は何とも思わず全員船の人となる。収容人員約二千七百余人、ただし各部隊の人員数はソ連兵の命令で集計はできなかった。船は北海道沖を進む。今までに捕虜になった経験のない我々はその言を信じうのみにする。一片の黒パン、海水から取り出したニシンを食事に出される。致し方なし。それもまたよき土産話の種との思いで、雲間隠れに見える北海道を眺めて、いよいよ明日は稚内港に着くと思込んだ我らに、船は進路を北方に変える。かくして樺太大泊港に着く。町のかなた、あなたに火の手が見える。戦争は負けたらかのごとくになると強く考えさせられた。

明朝、船は南に進む、今に稚内に着くであろうと思いきや一転東北方へ進路を変える。皆の者、話が違ふ、早く交渉せよと言うが、相手は言葉を濁らしてらちが明かない。船はシベリア領ソフガワニにいかりを下ろす。港には艦船がいてにらみを利かしている。また、山際には日本人と思われる人影が見える。今初めてだまされたと気がつくが後の祭り。そのうち輸送副

官下船せよとの声が掛かるので船よりおりる。その際、ソ連兵の大尉が流暢な日本語で、「今日より五十七日間ソ連において仕事に従事して、その後日本に帰す」「各部隊は今までの編成を解き一斉に下船せよ」と命令を伝える。

各部隊幹部各位と相談をするも一向にまとまらず。しかし、最終にはこれを受け入れることになり、全員下船する。駅には有蓋貨物列車が停まっていて、船をおりる者から車両に押し込み、満員になればドアを閉めて発車。ただしドアは約三〇センチくらいあけている。それは食事をもらうためと用便口であった。汽車は一路シベリア荒野をひた走る。我らはムリー地区第八收容所前で下車する。人員約五百人、收容所では宿舍の人員割はソ連兵が指図する。将校は別舎に收容される。ただ、ありがたく感謝したのは、收容所長が、「かつて昔樺太にいて日本の方にかわいがっていたのだ、今私にでき得る限り恩返しする」と言ってくれたことである。実際、仕事の内容は列車両側の土盛り仕事、ノルマ以上にしてくれた。最初雨具がなかった

ので雨天の日は作業中止、ただしノルマはつけてくれる。かくのごとく大変な日本びいきで、大喜びであった。

さて仕事の量によってノルマが決まりそれでパンが支給された。

最もよくできた隊	ノルマ四〇〇	パン四〇〇グラム
よくできた隊	ノルマ三五〇	パン三五〇グラム
まずまずできた隊	ノルマ三〇〇	パン三〇〇グラム
できの悪い隊	ノルマ二五〇	パン二五〇グラム
大変悪い隊	ノルマ二〇〇	パン二〇〇グラム
将校全員（ノルマは三〇〇％平均）	パン三〇〇グラム	

であった、しかし最悪でも三〇〇％で、それ以下はなかった。

約半年後、私は当番の方と道案内の人と共に鐵路沿いに三時間余り歩いて第二十一收容所に転出する。この收容所には満州よりの寄り合いの部隊で統制がとれない約千人の隊、そのまとめ役を仰せつかる。收容所内の将校編成をする。それがため宿舍の移動、人員等を調べる。それに基づき中隊長その任に就く。收容所

部隊長となり、副官には田中大尉を委任する。二人で仕事内容を定め規律ある部隊に編成する。その後規律も段々とよくなり、朝の点呼、作業等よくまとまり、作業能率も一段と上がり、給食もよく、皆の顔にも活気がみなぎってきた。

抑留地の生活

(1) 毎日の生活は単純なれど洗濯をする日が少なくて着の身着のままの生活でシラミが発生する。

時々衣服の消毒（高温の中で蒸す）また入浴は水を桶に一杯もらいサウナ式であかを落とす。

身体検査はおしりの張り具合で良い悪いを決める。他の病気等の検査はなく、これがために死ぬ者もいた。

(2) 収容所の人員は多いところで一千人くらい、ほとんど五百人を単位にしていたようだった。

(3) どういう労役に就いたか

イ 最初は収容所部隊副官。それは人員の掌握。

作業後、先任下士官等集合して、いかにすべきかを相談して、部隊を中隊単位にする。中隊

長、小隊長、分隊長に分ける。編成にあたり中隊は百五十人くらいとする。

ロ 収容所部隊長。人員の掌握、作業の点検、仕事、ノルマの最終決定に立ち会う。

ハ 炊事係。部隊の炊事の点検。一番重要なことは、満州よりもみが届いた時、ソ連の人は日本人の言を聞かず、もみを大釜でたいた。鳥やネズミなら食べるかもしれないが、人間の喉には通らない。これを理解していただき、うすを造って夜通しつき白い米にするため十人余りの人を無理にお願いをして徹夜で仕上げ、米の飯をいただく。ただし、それらの人の作業ノルマは隊全体で負担をする。特に革命記念日に牛の頭が二頭特配になり、炊事係一同、頭を大釜で煮てきれいに肉だけ取り、賞味してもらう。千人に二頭の頭では奥歯に申し訳ないくらいだが、これが精いっぱいのごちそうであった。野菜としては配給はなく、とげのある葉っぱを汁の浮きにしてビタミンの補給にする。秋には松茸

が松林に生えるが、匂いがないのでただ腹もちのために補食として食していた。

(4) 休日

特に指定日はないが日曜日の休日には洗濯、掃除、毛布の乾燥、シラミ取り等なかなか忙しい。

収容所の施設構造等は収容所別でさまざまで、採暖はベーチカ（五十人くらいの部屋に一個、暖炉の遠い人はその恩典には縁遠い）。

最後のコムソモリスク収容所は、昔牛舎だったのを改造したとので、六段ベッドに潜り込んで寝る始末なれど、あれこれと申すわけにはいかない。

(5) 洗脳教育

それは一年余り経た時より始まった。対象には将校を相手にしてボチボチとしていた。将校収容所では何もなし。自主管理としてしたことなし。

懲罰としては仕事のノルマが甚だしく、悪い時にその長が営倉に入れられるが、我が隊では収容所長との話し合いで許してくれたので一人もその

刑になった者は無し。

(6) 抑留中の生活と極限状態

一時、冬寒空に砂利を線路にまく作業にはホトホト弱った。特に寒空の夜、汽車が来た印にポーポと合図すると走って無蓋車に乗り、砂利まき終われば徐行している汽車から飛び下りる。やっとと思うとまた汽車の笛、行かねばならぬ。しかしノルマは砂利をまいた時間のみ、往復の時間は含まれていない。これに対して再度強硬に申し入れた結果、何とかノルマをつけるようになった。

それがため我々一部の将校は反動分子としてトラックに乗せられ行先不明のところに行く。しかしその収容所は前から反動分子として集まった人ばかり。その収容所生活をする人数が五百人となるので組分けをし、二百五十人一組をつくり、その片方の組長となる。皆よい人ばかり、民主的で、進んでまき集め、炊事、入浴の世話までしていただき、ありがたかった。

この収容所からコムソモリスク郊外の収容所に

転出する。この収容所は元満州の幹部将校の集まりで、一言でも反対すれば高慢の将校があれこれ言う。それも一方的で、己が偉い、この若僧がとの態度、日本が負けた遠因もこれらの分からず屋の集まりであったかにも見えた。その収容所も二時間ほどでそこをおさらば、ありがたい、他の収容所が変わる。

この収容所はまた違つてはなはだ民主的で、我らを喜んで迎えてくれた。部屋はさておき、何についても各位が率先してやってくれ、朝昼夜の食事も食堂で、ただ食券を持って行けばそこに運んでくれる。部屋の廊下には思い思いに碁将棋等もでき、下手は下手なりに教えてくれる人もいて、毎日が楽しく、捕虜であることすら一時忘れる一時もあった。

帰国

二カ月も過ぎた朝、今から名前を呼ぶ者は荷物をまとめて他の場所に集まれと一時間か二時間に二人ない

し三人と呼ぶ。その人たちは大学での工学部専攻者または僧侶等で一般の者はお呼びでなかった。午後三時頃、残った者全員荷物を持って集合せよ、とのことで集まる。そしてコムソモリスク駅に着く。汽車に乗るが行先不明、しかし汽車の中での兵の親切で、もしかしたら帰れるかの雰囲気。やがてハバロフスクを通過してナホトカに向かっているらしい。汽車での日数は忘れたが、朝十時、待ち焦がれたナホトカに着く。それを待っていたかのように兵、下士官からなる人に、今着いた者は広場に集合せよとのこと。集まると、人民裁判にかけられる。なかなかの者たち、これが日本人のかとも思われる言動、あれこれ人名を、ならすのように取り扱い、夜八時頃まで延々と続いていた。終わって昼食、夕食を食べて休む。

翌日は第二収容所、次は第三収容所と移動する。ここでは『赤旗の歌』、『インターナショナル』の歌を全員で合唱して十列に並んで港湾に向かって歩く。かなたに黒の十字の印の船が浮かんでいる。日の丸の旗等はない。寂しい、悲しい、戦いに負けたのですべてか

くのごとくなるか、涙が頬をぬらす。戦争はこりごり、二度とかくのごときことないようにとつくづく思い知らされた。

全員十列のまま船に乗り移る。そこには日本の人の姿はなく、ソ連人ばかり。我々は船倉で足の踏み場もない程に詰められる。一般の兵隊さんとは別のようだった。いよいよ船はナホトカを離れ公海に出る。それを待っていたかのようにソ連人は下船する。どこからか日本の船員その他の人が現れる。今まで何べんもだまされ通しだったが今度は違う、日本、母国へ帰ることができ、うれしい。船員さんが、皆様長い長い間大変御苦労さんでした、今この船は北海道函館港に向かっています。ご安心下さい。皆様方の家族宛に今電報を打つているところですと。長い長い間待ち焦がれ、この日の来たのをしみじみと思った。

函館港に船は着き、二日ほど米軍の方の質問があり下船する。金三百円をいただく。また函館から故郷までの汽車のキップ往復を受け取る。右を向いても左を見ても懐かしいものばかり。まずは散髪をしてもら

う。それから見るもの皆欲しいものばかり眼につく。我々の頭の中と現実との違いをいやと知らされる。船で青森港着。金は函館で財布の中は心もとないので質札を、防寒帽、防寒オーバーで金五百円いただき、汽車の中で食事にとリンゴを買う。駅に着けば吹雪、寒いのは寒いけれど、シベリアでこれ以上の寒さに耐えてきたので、さほど感じなかった。

乗車には色々なことがあったが、全員四人掛けで左右に移る姿を見る。何よりもありがたかったのは学生さん、何から何まで親切にお世話をしていた。ただただ頭の下がるだけ。ありがたい。東京駅では地下が宿舎、二日ほど待って我が家に着く。駅では電気が灯ったり消えたりしていたが、足取りも軽く、迎えに来てくれた兄たちに会う。うれしかった。

帰国後の生活

軍隊、抑留生活続きで、今まで勤めていた学校もC級戦犯者で追放される。新しい職場探しに一苦労。やっとのこと職場が見つかり、毎日弁当持ちの生活が始まる。その後会社を去って独立、紳士誂え服屋とな

り七十歳までこれをつけ、順調とはほど遠いが何とか生活をして現在に至る。

ほんの一言

(1) ネジ巻腕時計で二回二回と黒パンに化けるうれしさ

(2) ダワイ、ダワイ、行ったり来たりと変わるロシア語

(3) お互い同士でも手まね足まねで話をする大国のソ連人

(4) 日本とは違い五列十列しかわからない数の読み方

方

(5) 夏に走り回る子豚君のかわいいこと、秋には見えぬ、何、塩漬けにされて冬のごちそう

(6) どんな寒さにも負けぬ毛布の中のシラミ

(7) 冬には井戸の端に凍りつき春暖かくなると飛び

回るまた不思議なハエ

(8) 春来れば氷が溶けて上流へ上るサーモンドキング(鮭を獲るのは日本人、味わい食うのは現地ソ

連人)

(9) 東京ダモイいかほど聞いたかその数知れず

(10) 松茸は匂いで食うもの、その匂いのないものただ腹の足しだけ

(11) 日本では一人で満員なれど、何人でもどうぞお入りなさい、二本の丸太の用便所

(12) 夏は船で上下し、冬は汽車みち、何と便利な寒い国の交通機関

【執筆者の紹介】

住所 長浜市神照町

生年月日 大正七年八月二十七日

入隊 昭和十四年一月

階級 少尉任官 昭和十五年八月

中尉任官 昭和十七年八月

大尉任官 昭和二十年八月一日

入ソ 昭和二十年九月

抑留地 ムリー 第二十一收容所

コムソモリスク

引揚げ 昭和二十二年十一月二十七日

函館着

高田さんは、復員後公職追放令により教職を追われ、しばらく家業のビロード業を手伝っておられたが、独立して洋服店を開業され、経営と共に自治会長を十五年の永きにわたり勤められて地域の発展に尽くされ、現在全抑協長浜支部の役員として活躍しております。

(滋賀県 村田 健造)

労苦のこと

兵庫県 橋本文雄

生年月日 大正九(一九二〇)年四月十日

家族構成 祖母、父、母、弟二人、妹二人

学歴 昭和十一(一九三六)年三月、中川原村立

尋常高等小学校卒業

兵歴 昭和十五年十二月一日、大阪歩兵第二二部

隊(元第八連隊)入隊

(昭和十五年八月徴兵検査「第三乙種」合格)

昭和十六年三月末ごろ、中支派遣北野部隊森田隊へ。大阪港より南京上陸。一週間後、漢口へ転進。夜行軍により応城県番加集の警備に当たる。六月ごろから長沙作戦に参加し、九月中ごろ、北野部隊に内地へ帰還命令受領し、上海へ上陸。対岸の南通において、敵前上陸訓練を六カ月実施。(訓練は、揚子江のドロ水の中、大型鉄舟を用い、連日猛訓練であった)

昭和十七年三月に入り、夏服受領。リンガエン湾(フィリピン)上陸。隊は、トラックに分乗し、パタイン半島の米軍基地からの砲弾が切れ目なく頭上を掠める第一線に着く。京都の部隊がやられた後と知り、「ここが我が命の終わりか」と覚悟を決める。

中旬のころ、ジャングルの谷底で体を洗った際に発熱し、軍医の診断でマニラ市街の病院へ。入院中、日本軍がマニラを占領。退院後、コレヒドール島へ転送され、本隊に合流。中隊長に申告の折、退院は二十四人に減少していることを知る。復帰の翌日、隊の被服